

王昶雄先生を悼む

松田吉郎

王昶雄先生が亡くなられたのを知ったのは昨年（2000）6月の日本台湾学会において若林正文先生が「日本台湾学会ニューズレター」第4号（2000年5月発行）を「王昶雄先生追悼論文集」にしたとの御報告を聞いた時の事であった。しかも、先生が亡くなられたのが同年1月1日の元旦であったとは、私は露も知らなかった。もし存じておれば、私は同年1月5日から11日まで台湾に滞在しており、台北市中山市場南の御自宅を弔問していたと思うと残念でならなかった。

王先生と最初にお会いしたのは、1991年12月下旬の事であった。その時に私が台湾を訪問した理由は、中央研究院台湾史田野研究室主催の「台湾歴史的土壌問題」討論会に参加し、研究報告するためと、私の学生名倉昭子さん、石田（旧姓古川）順子さん二人の卒業論文作成のための聞き取り調査を行うためであった。彼女らの卒論テーマは日本統治時代台湾の教育についてであった。台湾で日本統治時代の教育を受け、聞き取りができる適当な方がおられたら訪問してお話をお伺いしたいと考えていた。運よく、討論会における私の発表の通訳の労をとって戴いた中央研究院中山人文社会研究所研究員の張炎憲先生に王昶雄先生を紹介して戴いた。

早速、私は学生二人と王先生のお宅を訪問し、王先生の生い立ちから日本時代の教育、日本留学時代のお話などをお伺いし、学生二人の卒論の基礎資料とさせて戴いた。

ここで王昶雄先生の略歴を紹介したい。王昶雄先生は本名王榮生、昶雄はペンネームである。1916年に淡水で生まれ、淡水公学校卒業後、1923年に東京の郁文館中学校に入学。29年に日本大学文学科に入った後、36年にさらにもう一度日大歯学部に入學した。日本在学中から文学活動を始め、台湾帰国後の1942年には代表作「奔流」を『台湾文学』3巻3号に発表した。平素は歯科医の仕事を行いつつ、文学活動をすすめていた。戦後、先生の作品は「皇民文学」として議論されたそうであるが、文学に関して全くの門外漢である私には詳しい事情はわからない。

王先生からお伺いした日本統治時代の教育のお話で印象に残っているものは、日本の教育に対しては概ね良い思い出をもっておられたのであるが、一つだけ日本人教師から論語を教わった事が心外であったと言われたことである。言うまでもなく、王先生は台湾漢族の伝統的な文人である。当時、公学校生であったとはいえ漢学の素養はもちろんあったであろう。漢学の本場の台湾の文人の子供に対して日本人が論語を教えるなど「釈迦に説法」もいいところであったと感じられたのであろう。

もう一つ、王先生からお伺いした話で印象に残っているのは中台統一問題の事についてであった。王先生は台湾独立を希望しておられた方であり、中華人民共和国と統一することを嫌い、また1945年以来の中国国民党政府、外省人支配には我慢ならなく、蒋介石が唱

えていた大陸反攻なんてとんでもないことであった。私に「中国の漢族と台湾の漢族は同じ民族であるが、統一するなんてとても考えられない。50年以上も別々の政治形態ですごしてきたからとても考えられない。また同じ民族は必ず統一しなければならないなんておかしいでしょう。例えば、イギリスとアメリカ合衆国は同じアングロサクソン民族であるが別々の国でしょう」とおっしゃられた。

当時の私は漠然と同じ漢民族同士であれば統一するのが望ましいかなと考えていたが、全く違うお考えに接して驚愕した。王先生だけではなく、お会いする研究者はみな同じ事をおっしゃられた。私はこの時から、中台統一問題は中国・台湾の人々が相談して決めなければならないが、出来れば台湾の人々の意思が尊重されればよいと思うようになった。「同一民族が必ず同一国家でなければならないという原則はない」というお言葉は、私に民族とは何か、また国家とは何かを考えさせるきっかけとなった。

もう一つ王先生の思い出は、先生は台湾語、日本語は話されるが、北京語を絶対に話されないという事である。また、台湾語や日本語には古い中国の語源が残り、北京語は進化したものであり、漢字本来の意味から離れているものがあるということをよくおっしゃっていた。例えば北京語の「物」を示す言葉は「東西（トンシー）」であるが、方角を示す東西の意味が全く無くなっており、典型的な例だとおっしゃられた。さらに、王先生は日本語が日本人以上に堪能であるから私との会話は100%日本語で可能なのであるが、ある時、私が淡水のスペイン城である「紅毛城」へ行ったという事を、つい北京語の「紅毛城（ホンマオチャーン）」と発音してしまった時には、いやな顔をされた。先生は何もとがめるお言葉を話されなかったが、北京語は自分達の母国語じゃない。母国語は台湾語であり、第二の母国語は日本語だよとおっしゃりたかったのではないかと後で気付いた。

王先生のお宅を訪問した際には必ず、奥さんの手料理を頂戴した。台湾の家庭料理を味わえて楽しみであるとともに、奥さんにはお手数をおかけしていつも申し訳ないと思いつつも美味しい料理に舌づつみをうっていた。王先生の奥さんへの愛情の深さはお写真等を見せて戴いてもよくわかった。王先生が亡くなれて奥さんはさぞかし、お嘆きの事、お淋しい事だと推察致します。

その後も先生には何度もお世話になった。先生が中心となって編纂された淡水国小九十週年紀念誌『孕育文教故郷情』を無理を言ってわけて戴いたのは、確か1992年の夏のことであったと思う。この時は、院生の竹中亮造君夫妻が台北を訪問していて、先生はわざわざ同君宿泊のホテルに出向いて届けて下さった。この書物は先生の母校淡水公学校の記念誌で、学生二人の卒論の資料になればと思っていたが、残念ながらその目的にはそわなかった。しかし、この書物によって同校出身には李登輝前総統、台湾人最初の医学博士である杜聰明氏など錚々たる人物がいたことを知った。

先生に最後にお会いしたのは1999年4月2日であった。この時の訪台は中央研究院台湾史研究所籌備処主催の「契約文書與社会生活」討論会への参加が主目的であった。先生に久しぶりにお会いして、先生はお元気だったが、少し痩せられたなという印象をもった。先

生に今回の訪台目的をお話し、励ましのお言葉を頂戴した。その時も奥さんの手料理を頂戴した。最後に先生のお声を聞いたのは、9月の台湾地震直後、国際電話で安否をお尋ねした時であった。「台北は大丈夫だけれども、直下型地震は怖いね」とおっしゃっていた。電話ではお体の調子もわからず、またお声もお元気そうだったので、まさか翌2000年元旦に亡くなられようとは思ってもいなかった。

もう少し長生きしておられれば、4月の総統選挙で、先生宿願の台湾独立をテーゼにかかげる民進党陳水扁氏の当選を知って、お喜びになられたことであろうと思うと残念でならない。

先生は日本を台湾と同様にこよなく愛して下さった。私など若輩者にも日本人として親しく接して戴いた。もう台北へ行っても会えないし、お話も伺えない。淋しい限りである。先生は台湾人であるが、私にとって先生は日本人以上に日本や日本人（私も含めて）を愛して下さった方でした。ご冥福をお祈り致します。